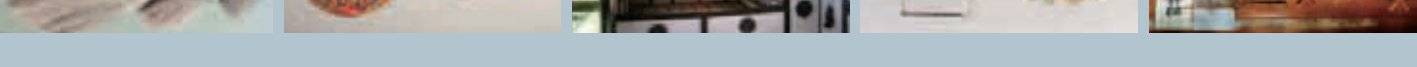
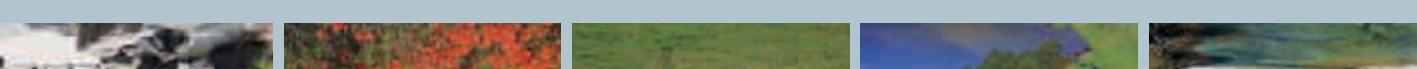
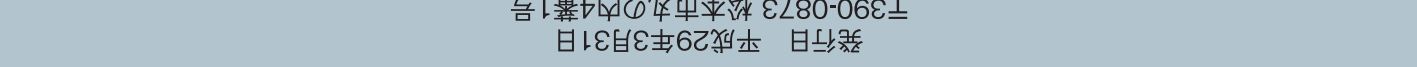
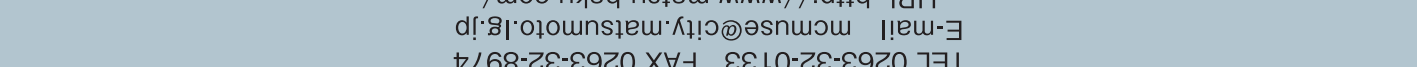


いにしへの松本探訪

松本旧町名碑マップ



松本市立博物館



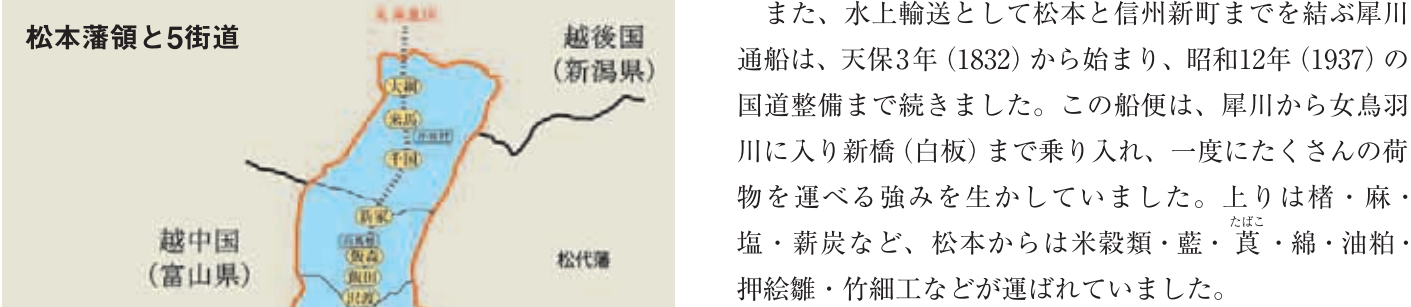
城下町松本の形成

■城下町松本の成り立ち

松本の地は古くから畿内と東国を結ぶ交通の要衝で、平安時代には国府がおかれ信濃国の政治の中心地となり、優れた文化がいち早く伝えられていました。鎌倉時代には小笠原氏が信濃の守護として進出していました。

戦国時代には、武田氏の支配を経て、天正10年(1582)に小笠原貞慶が「深志」を「松本」と改め、城下町整備に着手しました。天正18年に豊臣秀吉の命により石川数正父子が赴き、康長は天守造営(1593～94)と城郭経営、城下町造りを進めました。

城下町は天守を取り巻く三重の堀の外側、善光寺街道沿いに町人町(親町三町・枝町十町・二十四小路)があり、その周辺に寺社が配置されるなどの町割りが計画的に行われ、水野氏時代の享保年間(1716～35)まで、約150年かけて完成しました。



また、水上輸送として松本と信州新町までを結ぶ犀川通船は、天保3年(1832)から始まり、昭和12年(1937)の国道整備まで続きました。この船便は、犀川から女鳥羽川に入り新橋(白坂)まで乗り入れ、一度にたくさん荷物を運べる強みを生かしていました。上りは楳・麻・垣・薪炭など、松本からは米穀類・鹽・糞・綿・油粕・押絵漆・竹細工などが運ばれていました。

町家中心の城下町は、商品流通の拡大とともに財力を蓄えた商家が力を発揮するようになりました。松本藩の藩主は7代23人で、幕末期の町の人口は約15,000人、筑摩郡と安曇郡の藩領全体では約12万人でした。この地域、いわゆる旧松本藩領には今でも似かよった文化が伝わっています。

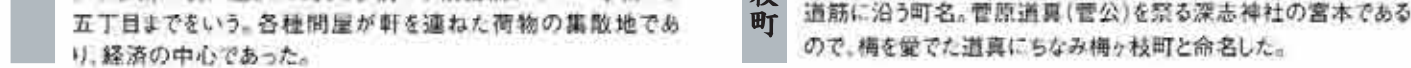
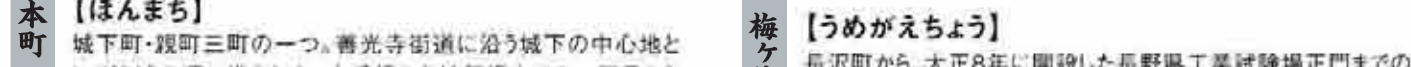
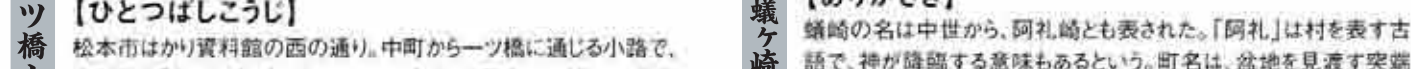
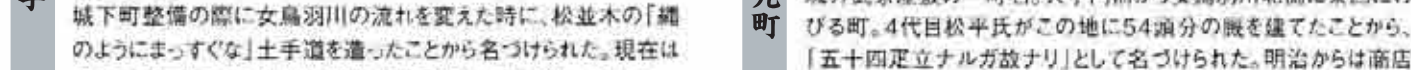
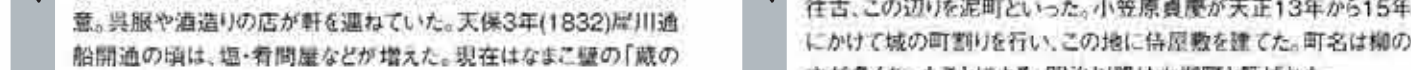
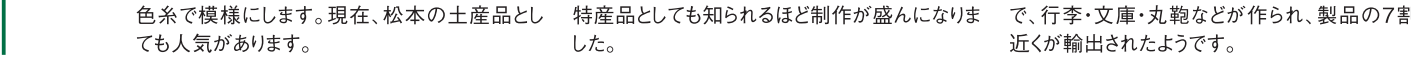
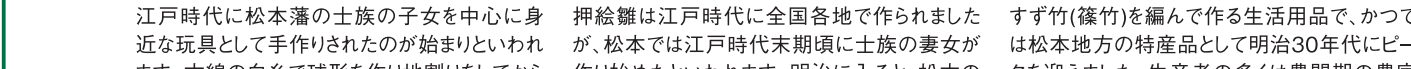
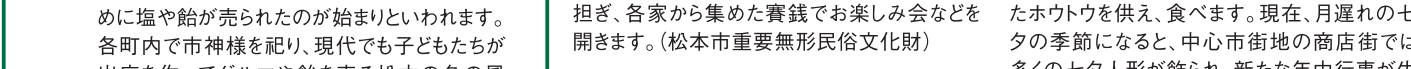
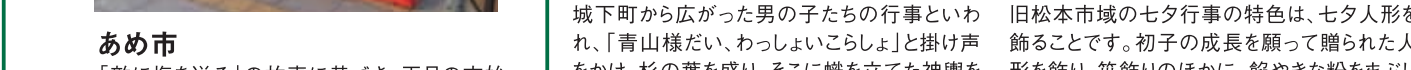
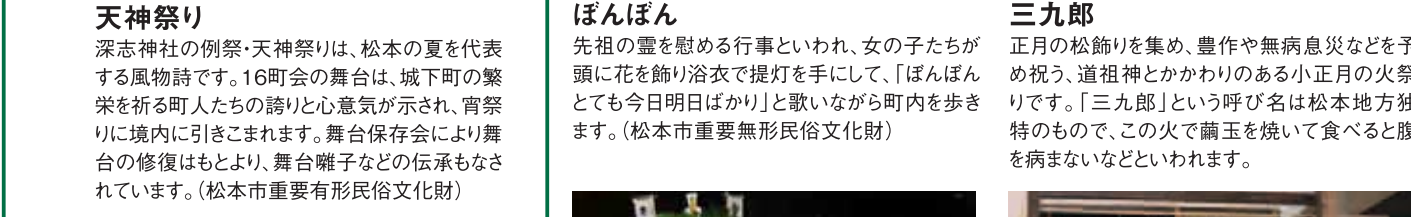


江戸時代から伝わる文化

【城下町の繁栄】

265年も続いた江戸時代は戦いのない比較的稳定な文化が栄えた時代でした。城下町松本は、松本藩の中心地で交通の要所でもあり、信濃国一番の商都でもありました。糞・麻・紙などの特産物は全国に販売され、本町・中町には様々な問屋や商店が軒を連ね、東町は旅館屋が建ち並んで賑わいをみせていました。また、豊富な湧き水を利用した紙漉き・紺屋(染物)・酒屋・豆腐屋・味噌屋などが多数ありました。市内には今も名残をとどめる文化が続いています。

【受け継ぎ伝えたい文化】



明治以降の新しい町

■城下町から近代都市への変革

明治維新は激動期でした。廃藩置県により松本藩は松本県から筑摩県、長野県へと、わずかな間に大きな動きがありました。城郭の破却や堀の埋め立て、廃仏毀釈による寺の廃止や火災などもあり、城下町の姿は一変しました。一方、郵便・電信電話や交通手段の発達、蚕糸業の発展などから新しい町が広がり、松本城下町は近代都市への歩みを始めます。

■「天守は現った!」

明治4年(1871)の廃藩置県により不要となった城郭は、櫓や門などが破却、翌年には松本城天守が競売にかけられ、235両で落札されました。下横田町副戸長であった市川量造は、天守を産業振興のために活用し、市川量造ようと有志と奔走、本丸広場を会場に博覧会を開催し、その収入で天守を買い戻しました。市川らの将来を見据えたこのできごとは、現在の松本にとって特筆すべきことでした。

